



Title	マイナー文学としての『ベトナム難民少女の十年』 : 漢語を抛りどころにローカルな声を生きる
Author(s)	林, 貴哉; 宮原, 暁
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 185-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マイナー文学としての『ベトナム難民少女の十年』
—漢語を抛りどころにローカルな声を生きる—

Reading “The Decade of a Vietnamese Refugee Girl” as a Minor Literature
Living in Local Voices with Chinese Characters as the “Middle”

林 貴哉*

HAYASHI Takaya

宮原 暁**

MIYABARA Gyo

Abstract

This essay analyzes “The Decade of a Vietnamese Refugee Girl” written in Japanese by Tran Ngoc Lan, a Chinese Vietnamese who was accepted into a refugee by Japanese government. Lan has been using multiple languages including “Mandarin,” “Cantonese,” “Hainanese,” “Vietnamese,” and “Japanese” in her life in a complex and interrelated manner. Lan also identifies herself as a “Chinese-Vietnamese,” a “boat people,” and a “Vietnamese-born Japanese of Chinese descent”. In order to capture Lan's experience of living in a contact zone of multiple languages, this essay considers “The Decade of a Vietnamese Refugee Girl” as a minor literature.

First, this essay took up four scenes: her life in Vietnam, her exile at sea after escaping from Vietnam, her junior high school life that she transferred to immediately after coming to Japan, and her participation in university entrance examinations in Japan, and analyzed how literacy of Han writing have become a sort of “passport” for Lan, who has been confronted with local spoken languages. She was born and raised in Chinatown in Saigon. Speaking Hainanese and Cantonese as first languages, she experienced exclusion from the “national” spoken language, Vietnamese, in her life in Vietnam. Before leaving Vietnam, she prepared herself to pronounce her brother's address in Japan in Japanese. This provided her with emotional support when she left Vietnam by boat. After coming to Japan, she was confronted with a new spoken language, Japanese. At the junior high school she attended after arriving in Japan, she entered the Japanese curriculum based on her literacy in kanji, the written language. However, when it came to university entrance exams in Japan, Japanese as a spoken language again prevented her from entering the university of her choice.

Lan was excluded from various local voices, such as Vietnamese and Japanese, through her mobility in the contact zone of multiple languages. She was not fully accepted in either place. On the other hand, the Chinese characters in the middle of the various local voices were a source of strength for her. However, Lan's description of her homeland in her autobiography shows that local spoken languages are essential for expressing emotions. She desired to live in different local spoken languages. The use of these local spoken languages was also a source of comfort to her. She was trying to live with the local voice, relying on the Chinese characters. Through the analysis in this essay, we have suggested the possibility of a discussion on the medium that connects multiple local voices.

* 大阪大学国際教育交流センター・特任研究員

** 大阪大学大学院言語文研究科・教授

Keywords: autobiography, minor literature, Vietnamese refugees in Japan, Chinese Vietnamese

I はじめに

私には返り点なんか付けずに、そのまま、きつと作者の発音に最も近い音とリズムで漢詩でも、「論語」や「十八史略」でも読めるし理解できるのに、どうして中国語を日本語式に読み直し、理解しなおさなくちゃならないのか、そして、そんな特殊技術ができれば共通一次に通る、そうでなくては国立大学に進学できないのか、と矛盾に悩み、泣かされました（トラン・吹浦 1992: 137-138）。

この文章はインドシナ難民として日本に受け入れられた中国系ベトナム人のトラン・ゴク・ラン（以下、「ラン」と記す）が日本語で出版した自伝的物語『ベトナム難民少女の十年』の一節である。ベトナムの華僑学校で中学3年生まで教育を受けたランは、漢文を「中国語」⁽¹⁾で読み上げ、その意味を理解することができると考えている。しかし、当時、共通一次試験と呼ばれていた国公立大学入学のための一次試験では、漢文の訓読ができなければ得点することはできなかった。

この自伝的物語は、これまで外国人を受け入れる日本社会の側から、外国人受け入れ政策の問題点を明らかにし、改善をめざそうとする視点から読まれることが多かった。日本での生活において壁となっている日本語を習得するためにどのような支援策が必要なのかといった点や、日本社会側がどのような制度を整えていかなければならないのかといった点が、そこでの主たる関心であった。

『ベトナム難民少女の十年』において「編集」として執筆者に名を連ねている吹浦忠正（出版当時、難民を助ける会代表幹事）は、同書の「序文」において、日本の難民受け入れに関する問題点や、日本に定住した難民が抱える共通の問題点を述べている（トラン・吹浦 1992: 7-11）。また、文庫版の最後に掲載されている「ランちゃんその後」という吹浦による文章では、ランの自伝的物語が出版に至った経緯として、（1）難民支援に携わっている支援者に報告をしたい、（2）一人の人物像を通して、一般読者に難民の実情を知ってもらいたい、（3）在日インドシナ難民の若者が読むことで、大きな自信と希望をもって自立の道をめざしてほしい、という3点が挙げられている（トラン・吹浦 1992: 220）。これらの部分で吹浦が強調しているのは、海外から来た「難民」を、「日本人」としてどう受け入れるべきかという課題である。

しかしながら、『ベトナム難民少女の十年』は、もう一つ別の読み方も可能である。移動する人を受け入れる制度ではなく、移動する人の主観を軸とした読み方である。なぜ主人公のランは、ベトナムを離れることができたのか（離れざるを得なかったのか、ではなく）、また、さまざまな困難に直面しながらも、なぜそれを克服することができたのか（どのような困難に直面し、どのようにそれらを克服していったか、ではなく）、といった問いを軸にこの自伝的物語を読むことも可能なのである。

こうした読みが特に本書の場合、重要な意味を持つと意識されるのは、ランとその家族がベトナムから出国する以前から、すでに移動の渦中を生きてきたことに気づく際である。ランは、海南島からベトナム南部の都市サイゴンに移住した両親のもと、華人⁽²⁾居住区のチョロンで生まれ育ち、華僑学校に通った後、難民としてベトナムを出国し、香港を経由して日本にやってきた。ランの兄二人は、ランがベトナムを出国する以前から日本に留学していた。またランの両親は、ランとは別の経路でベトナムを出国し、マレーシアを経由して日本にたどり着いている。

このようにランとその家族が、移動の経路に身を置き、その経由地の一つとして日本にたどり着いていることは、「序文」や「ランちゃんその後」を読むだけでは、すぐにわからない。

「難民」を支援するという観点では、roots の確定こそが重要であるが、人びとの移動の経験を理解するという点では、routes の中を移動していることを理解することこそが重要なのである（ギルロイ 2006: 44）。ランは、自らのことを語る際に、文脈に応じて、「中国系ベトナム人」や「ボート・ピープル」、「中国系でベトナム生まれの日本人」といった呼称を使い分けている。これらの呼称は、「ベトナム人」、「中国人」、「日本人」といった国民国家の国民という枠組み、ないしは特定の roots とは一致しない。ランが「私はベトナム人です」もしくは「私は日本人です」などと断言することはないのである。さらに、言語に注目すると、ランは自身の使用してきた言語として「中国語」、「北京語」、「広東語」、「海南語」、「ベトナム語」、「日本語」を挙げている。社会言語学におけるモノリンガルバイアスを乗り越えようとする議論では、ことばを国家や民族といった視点で区切り、列挙することのできる「特定名を持つ言語」(named language) と見なすことを、複数言語使用者の言語使用に合致しない言語のとらえ方であると批判し、特定名を持つ言語の境界を超えた「個人語」(idiolect) の使用に注目している (Otheguy, García & Reid, 2015)。ランの著作からも複数の「特定名を持つ言語」(named language) を複合的に使用し、ランの「個人語」(idiolect) を形成している様子を読み取ることができる。しかし、大学入学試験での漢文訓読のエピソードにおいて、漢文、すなわち書記言語ないし書面語としての漢語（以下、本稿で単に「漢語」といった場合、この意味での漢語を指すこととする）^③の意味は理解でき、発音することもできるが、その意味を「日本語式」に読むという点に困難を抱えていたと述べているように、ランは言語的な排除を経験することによって、特定名を持つ言語の存在を認識せざるをえない状況に置かれていた^④。

ランの呼称に注目するとどこかの地域に収斂させられることを避けているようであり、また、言語に注目すると、ランは複数の場所を移動するなかでそれぞれの地域において支配的な言語と対峙してきたことがわかる。このように複数の中心の周縁を移動しながらことばを使用してきたランの著作を読み解くために、本稿では「マイナー文学」という概念を手がかりとしてみたい。マイナー文学とは「マイナー言語の文学のことではなく、むしろメジャー言語のなかにマイノリティが生み出す文学」と定義されている（ドゥルーズ・ガタリ 2017: 27-28）。記述戦略としてマイナー文学の概念を用いることによって「メジャー文学の周辺に脱領域的な境界領域が存在することを予告し、かたちの見えない対象にアプローチすることが可能になる」（宮原 2017: 61）。ランの著作は日本語で書かれており、1990 年に中央公論社から単行本が出版された後、1992 年には文庫版が中公文庫として出版されている^⑤。本稿では、ランの著作を日本文学や中国文学、ベトナム文学といったメジャーな文学には属さない境界領域に位置づけ、マイノリティであるランがマジョリティの言語である日本語を用いて書くマイナー文学として読んでいく。ランのことばの経験を分析することを通して、ランの使用する複数の言語の結節点には何があるのかを検討していきたい。

II ベトナム難民と『ベトナム難民少女の十年』

本章では、『ベトナム難民少女の十年』というタイトルにある「ベトナム難民」とはどのような人たちなのかについて簡単に振り返ったのちに、そうした難民と見なされつつも、じつはランたちが出国前は華人としてベトナムで暮らしていたことを示す。

1. ベトナム難民とは

ベトナム「難民」とはどのような人たちを指すのか。本間（1990）は、この点に関して「狭義の難民」と「広義の難民」に分けて説明している。「狭義の難民」は、1951年にジュネーブ会議で採択された難民条約にもとづく難民を指し、「迫害を受けそうだという事実関係と、そのことに恐怖感を抱いているという当人の心理状態」が難民としての要素となる（本間 1990: 26）。一方、「ベトナム難民」を含む「インドシナ難民」は「広義の難民」に含まれる。1975年12月の国連総会で、インドシナ難民に対する人道的援護を国連難民高等弁務官事務所に命ずる決議が採択されたことで、インドシナ三国（ベトナム・ラオス・カンボジア）から逃れてきた者（以下、インドシナ難民）は難民条約にもとづく審査を受けなくても、難民と見なされるようになった。本稿では、「難民」の語を後者の定義に即して用いることとする。

第二次世界大戦後の東南アジアでは植民地の独立が相次いだが、ベトナムでは1945年9月2日にベトミン（ベトナム独立連盟）のホー・チ・ミンが「ベトナム民主共和国」として独立を宣言している。しかし、1945年9月23日にはフランスがインドシナに復帰し、第1次インドシナ戦争（1946～1954年）へとつながっていった。1949年には中華人民共和国が成立したことにより、アメリカ合州国は共産主義の拡大を阻止するという意図のもと、1950年以降、フランスを支援するようになった。

第一次インドシナ戦争の結果、ベトナムは北緯17度線で南北が分断された。その後、第二次インドシナ戦争（1960年～1975年）では、アメリカ合州国とベトナム共和国（南ベトナム）政府軍による勢力と、ベトナム民主共和国（北ベトナム）人民軍や南ベトナム解放戦線による勢力が対立した。1975年4月30日には、人民軍戦車部隊がベトナム共和国の首都であるサイゴンの大統領官邸に突入し、ベトナム共和国のズオン・ヴァン・ミン大統領は無条件降伏した。翌年の1976年に南北ベトナムが統一され、ベトナム社会主義共和国が樹立された。

1975年4月以降、新しい共産党政権によって逮捕、報復される可能性が高く、新政権に政治的・経済的に強い不安・不信を持つ者たちがベトナムから出国するようになった。当初、その多くは「南ベトナム軍・政府関係者とその家族、豊かな華僑や華人（中国系ベトナム人）」であった（五島 1994: 57）。漁船等に乗ってベトナムから脱出した人々は、「ボート・ピープル」と呼ばれており、出国後、自力で周辺諸国にたどり着く場合もあれば、海上を漂流中に貨物船やタンカー等に救助されて寄港地に上陸する場合もあった。

自国を出国した難民は、一次庇護国の難民キャンプに受け入れられた後、定住受け入れを行っている第三国に定住することになる。国連難民高等弁務官事務所の調査によると、1975年から1995年の間に一次庇護国・地域に到着したベトナム出身者のうち、船で出国したボート・ピープルが796,310人、陸路でタイに逃れたランド・ピープルと呼ばれる者が42,918人であった。最も多くのボート・ピープルを受け入れたのはマレーシアであり、それに香港、インドネシア、タイ、フィリピン、シンガポール、日本等が続く（United Nations High Commissioner for Refugees 2000: 98）。

これら一次庇護国・地域の難民キャンプにおいて、難民は定住希望先を国連難民高等弁務官事務所に伝え、定住受け入れ国からの許可が下りるのを待つ。ベトナム出身者の受け入れ数が最も多かったアメリカ合州国は1975年から1995年の間に424,590人を受け入れており、オーストラリア、カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、オランダ、日本等が定住受け入れ国となっている（United Nations High Commissioner for Refugees 2000: 99）。

当初、日本政府は難民の定住受け入れを行っておらず、一次庇護国として一時的な滞在を認めるのみであった。その後、1978年4月の閣議決定によって、日本に一時滞在中のベトナム難

民の定住受け入れが開始された。1979年4月には日本に一時滞在している難民だけでなく、インドシナ三国（ベトナム、ラオス、カンボジア）から周辺諸国の難民キャンプに逃れ、一次庇護を受けている難民も日本での定住受け入れの対象になった（内閣官房インドシナ難民対策連絡調整会議事務局 1996）。日本は2005年度末に受け入れを終了するまでに合計11,319人のインドシナ難民の定住を許可した。その内訳を出身別で見ると、ベトナムが8,656人、ラオスが1,306人、カンボジアが1,357人であった（アジア福祉教育財団難民事業本部 2016）。

2. ラン一家の華人としての背景

五島（1994）にあるように、ベトナムを逃れた者のなかには多くの華人が含まれており、『ベトナム難民少女の十年』の主人公であるランもその一人であった。しかし、インドシナ難民は統計上は、ベトナム、ラオス、カンボジアという出身国別に記録されており、華人の割合は明らかにされていない。インドシナ難民として日本に受け入れられた華人がどの程度の規模で日本に定住しているかは把握できないが、日本に定住したインドシナ難民に関する現地調査の報告からは、中国系ベトナム人と非中国系ベトナム人の間に区別があることが推し測られる。神戸のベトナム人コミュニティで調査を行った戸田佳子によると、神戸在住ベトナム人の間には、出身地（北部出身／南部出身）、宗教（カトリック／非カトリック）、エスニシティ（中国系ベトナム人／非中国系ベトナム人）の3種6項目の弁別指標に沿った棲み分けが見られるとされる（戸田 2000: 38-39）。『南京町』と呼ばれるチャイナタウンが位置する神戸市中央区には、1980年代から広東語を話す中国系ベトナム人のグループが居住していたと記録されており（戸田 2000: 39）、2000年時点でも、神戸市中央区のベトナム人は中国系ベトナム人が多くを占める一方、長田区、須磨区、兵庫区には、非中国系ベトナム人が多く居住していると報告されている（戸田 2000: 40-42）。中国系と非中国系ベトナム人のこうした棲み分けの実態は、両者が互いに他を異なる集団として認識していることを示唆している。

『ベトナム難民少女の十年』において、ランは自身や家族の経験を語ることを通して華人に関する記述をしているが、インドシナ難民として日本に定住した他の華人についての記述は限定的である。『ベトナム難民少女の十年』は難民を助ける会の支援を受けたインドシナ難民の当事者であるランと、その支援者である吹浦が、日本に暮らす読者に向けて共同で執筆した著作である。支援の対象は「インドシナ難民」でなければならないのである。

物語は基本的には一人称の「私」を主語として進められるが、所々に字下げされた状態で、吹浦による「编者注」や新聞記事・書籍からの抜粋、ランと関わりのある支援者やベトナム系移住者によるメッセージや意見等が挿入されている。特定非営利活動法人難民を助ける会とは、1979年にインドシナ難民を助ける会として発足した団体であり、インドシナ難民を対象に日本語教育や教科支援などの活動を行ってきた（難民を助ける会・さぼうと 21 2019: 70）。教育支援のなかでも特徴的なのは、1982年に発足された返済義務のない「難民救援奨学金制度」である。ランも奨学金を受給したインドシナ難民の一人であった。ランは「あとがき」で執筆の過程について次のように述べている。

この本は尊敬する吹浦忠正先生との合作のようなものです。先生は難民問題を深く研究して関係のご著書があるばかりでなく、早くからインドシナと関わりを持ち、在日インドシナ難民の多くにとって父親（兄？）みたいな人です。私にとっては医学部への進路を決めてくださった人ですし、身元保証人でもあります。ですから、この本は私が一を言えば十を知る先

生がまとめてくださったからこそ上梓できたといっても過言ではないでしょう（トラン・吹浦 1992: 217）。

この「あとがき」にもみられるように、この著作は、吹浦に強い恩義を感じているランによって書かれている。このため、仮に「ラン本人の偽らざることば」といったものを想定するならば⁶⁾、本書は、そうしたことばによって書かれた著作だとは言えない。しかし、だからこそ、本書は、マイナー文学として、ラン本人と彼女を取り巻く多様なことばとの交渉の軌跡をたどりながら読むべきだとも言えるのである。こうした視点に立ち、本稿では、トラン・ゴク・ランという実在する人物と『ベトナム難民少女の十年』において1人称で語る主人公を便宜上、区別し、前者を「ラン」、後者を「私」と呼んで考察することとする。

ランの物語を理解するために、登場人物とあらすじを整理しておきたい。本書は12章からなる自伝的物語である。第1章と第2章の舞台はベトナムであり、第3章はボートで漂流をした海上、第4章は香港の難民キャンプでの出来事が語られ、第5章から第7章では日本での生活に焦点が当てられている。残りの第8章から第12章は時系列に沿った記述ではなく、複数の場所や時期の出来事が関連づけられながら記述されている。

ランの父は中国南部に位置する海南島の生まれであり、日本軍の海南島への侵攻をきっかけに1940年代初めに船でベトナムに逃れた。ベトナム南部の都市サイゴンの華人居住区「チョロン」で生活をはじめ、後にランの母になる人物をベトナムに迎えた。ランが生まれた頃、両親は洋品店を営んでいた。

ランは7人きょうだいの一番下で、兄や姉も全員チョロンで生まれ育った。ランが生まれた1963年は、ベトナムが「ベトナム共和国」と「ベトナム民主共和国」に分断されていた時期であり、ランが生まれ育ったのはベトナム共和国の首都サイゴンであった。ランの長兄のチーは、サイゴン陥落前の1971年4月から福岡県の九州産業大学工学部機械工学科に留学しており、次兄のトリもほぼ同時期に日本に留学していた。

ランがチョロンにある中国系の小学校を卒業した1975年にベトナム共和国は崩壊し、ランの家族の生活は一変する。ベトナムでの生活に困難を抱えるランは兄と姉と共に、合計で38人が乗る12、13メートルほどの船に乗ってベトナムを出国した。香港の難民キャンプを経て、日本に来ることとなった。父母は、ランよりも後にベトナムを出国したが、マレーシア経由で先に日本に到着しており、トラン一家は留学生として先に来日していた兄が暮らす群馬県桐生市で新たな生活を開始した。

来日後、ランは中学3年生に編入したが、学年末までの短期間では十分に日本語ができるようにはならなかったため、さらに1年間、中学3年生として学ぶことになった。ベトナムでの経験と通算して3度目の中学3年生を経験するなかで、学校教員やクラスメートの支援を頼りにしながら学習を進め、ランは進学校として知られる県立高等学校に進学した。医師になりたいと考えていたランは受験勉強の末、聖マリアンナ医科大学の医学部に入学し、医師となった。物語の結末の時点でランは日本国籍を取得し、「山川玉蘭（やまかわ・ごくらん）」という日本名を持つようになった。

III 記述戦略としての「マイナー文学」

本稿では、『ベトナム難民少女の十年』をマイナー文学として読むことを中心的な課題としている。その方法について検討する前に、複数言語環境をめぐる今日の研究動向にこの課題を位置づけておこう。複数言語環境を移動した経験にもとづいた文学作品は、しばしば第二言語

の習得や教育に関心を持つ研究者の研究対象となってきた (Pavlenko 1998; 中山 2016; 川上 2021 等)。

台湾で生まれ3歳で来日した温又柔や、オーストラリア在住の日本人作家である岩城けいが著した自伝的な要素が強い作品を取り上げた川上は、文学作品を分析することを通して、「複数言語環境で育っていく人の複数言語使用や自らの複言語複文化状況に関わる心情面」や「子どもが幼少期より複数言語環境で成長する経験と記憶」について考察している (川上 2021: 131, 154)。

川上が用いる「複言語複文化」という用語は、欧州評議会の言語政策において示された複言語主義にもとづいている。複言語主義においては、社会の多言語状況ではなく、個々人の複数言語使用に焦点が当てられ、すべての技能が同等のレベルでなくとも、一人ひとりが複数の言語を部分的であれ使用できることに焦点が当てられる。複言語複文化能力は「複雑に入り組んだ不均質な寄せ集めの目録としての複合能力」であり、「複雑で不均質だとしても全体としてひとつのもの」であると考えられている (コスト・ムーア・ザラト 2011: 252, 257)。川上は、「複数言語環境で育っていく人を理解し、アカデミックなテーマとして議論するためには、複数言語使用の実態把握だけではなく、そこに生きる人の複数言語使用や複言語複文化状況に関わる『感情』『感覚』『情念』の世界に深く分け入ることが不可欠である」と述べている (川上 2021: 132)。そのうえで川上は、幼少期より複数言語環境で成長した当事者が自らの心情を生き生きと描いているという理由で、温又柔の『台湾生まれ 日本語育ち』を取り上げ、「当事者による貴重な学術研究書とも言える」と評価している (川上 2021: 132)。例えば川上は次の部分を引用している。

カタカナやピンイン、そして簡体字や繁体字といった中国語の漢字を織り交ぜた文章は、少なくとも書いている本人であるわたしにとって、最も自然なニホン語なのだ (温 2016: 25)。

この引用を通して川上が指摘するのは、温の著作においてことばが複合的にとらえられているという点である (川上 2021: 142)。さらに、温がことば自体のとらえ方を示している次の部分を引用している。

そもそも、中国語と台湾語と日本語と、ひとつずつ数える必要はないのかもしれない。三つの母語がある、というより、ひとつの母語の中に三つの言語が響き合っている、としたほうが、自分の言語的現実をぴたりと言い表わせるのではないか。考えてみればわたしは、中国語や台湾語を外国語として、というよりは、自分のニホンゴの一部のように感じている。わたしはもう、母たちの声を「和訳」しない。むしろ、記憶に向かって耳を凝らし、日本語として発せられたのではない音をたぐりよせる (温 2016: 234)。

川上は、温のことばのとらえ方が、近年の社会言語学においてメトロリンガリズム (Pennycook & Otsuji 2015) やトランスランゲージング (García & Li Wei 2014) といった概念を通して示されている動態的な言語使用の実態と共通すると指摘している (川上 2021: 143)。

川上のこの指摘は、『台湾生まれ 日本語育ち』の著者である温又柔を、「複数言語環境で育っていく人」の一人としてとらえたものとしてはあるいは正しいのかも知れない。しかし、著者を表現者にとらえた場合、メトロリンガリズムやトランスランゲージングが見落としがちな2つの点を指摘しておく必要がある。

その一つは、『台湾生まれ 日本語育ち』が「主に日本語を用いる読者」に向けて語られているという点である。その「日本語」は、もちろん十全たる規範的な「日本語」を意味しているわけではない。むしろ、「日本語として読める」、しかしその文章には「日本語としては読めない要素」がふんだんに盛り込まれ、それが作品の魅力となっているという点が、『台湾生まれ 日本語育ち』においては重要なのである。『台湾生まれ 日本語育ち』、そして『ベトナム難民少女の十年』をマイナー文学、すなわち「メジャー言語のなかにマイノリティが生み出す文学」として読む必要があるのもこのためである。

もう一つ、見過ごすことのできない点は、温の表現の面白さが、「複言語主義」が含意する音声言語の複数性というよりは、話しことばと書きことば、あるいは声と文字の取り合わせを起点としているという点である。『台湾生まれ 日本語育ち』には、台湾で翻訳された中文版がある。この翻訳では書きことばとして、閩南語（台語）、中文、日本語の漢字の区別がつきにくく、どうしても音声的にこれらの言語を区別せざるを得ないが、規範的な中文が書かれたテキストのなかに、音声を混入させることを文学作品として許容し得るかどうか微妙なところである。「日本語」のテキストは、もともと音声と文字の取り合わせの妙に、芸術的な価値を生じさせてきた。一つの漢字を経由して異なる音を結びつける、一つの音を手がかりに異なる漢字を結びつける語呂合わせや洒落は、他の言語環境にもなくはないが、日本語の環境において「馬鹿馬鹿」しくも豊富である。また日本の戸籍では、名前の読み方は自由であり、芸術的

なキラキラネームを生み出しているのも、この例と言えよう。

齋藤希史は、「近代以前の中国を起点に東アジア全体に流通した漢字による文語文をひとまず『漢文』とし、それを原点として展開した *écriture* — かけられた言葉の圏域」を「漢文脈」と名づけたうえで、

「『漢文』という *écriture* の可能性は、東アジアにおける地域の諸語を越えて展開したところにあるのであって、それが日本語か中国語かなどという議論は、書かれたことばが書かれたことばとして持つ可能性を、統一された国家の音声によって抹殺しようとすることになりかねない」と述べている（齋藤 2005: i）。『台湾生まれ 日本語育ち』、そして『ベトナム難民少女の十年』をマイナー文学として読むということは、対象を、その属性に即して定義する代わりに、故地と移住先の「文化」として想定される言語や文化の属性とその欠如においてとらえるということであるが（図1）、日本列島とインドシナ半島を含む東アジアでは、書記言語ないし書面語としての漢語と、ローカルな音声言語、あるいは「声」とのせめぎ合い、ないし対話に着目する必要がある。そこで「書記言語ないし書面語としての漢語」は、多様なローカルな音声言語の一つとしてのマイノリティの言語とマジョリティの言語を媒介すると予想されるのだ。図2はそれを模式化したものである。中心にある規範的な漢語が、破線や点線で示される周縁では非規範的になり、ローカルな声を媒介できるようになっていくことを示している。

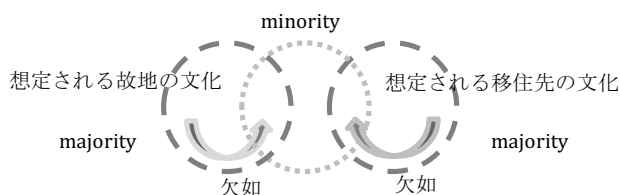


図1 マイナー文学とマイノリティ

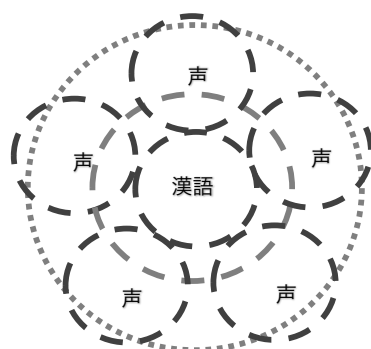


図2 ローカルな声と漢語の媒介性

もちろん、誰もが漢字を読めるわけではないこと、規範的な漢語と非規範的な漢語との間に優劣がつけられることには注意する必要がある。後者について、中国や台湾などでは、規範的な漢語がそうではない漢語に対して優位性を持つと考えられている。『台湾生まれ 日本語育ち』の中文版や、東南アジアの華僑華人が書いた小説は、規範的な中文で書かれた文章に比べて一段低くみられがちである(王 2006)。だがこうした規範的な中文の優位性は、漢語の書面語としての特質によるというよりは、漢語と規範的な音声言語との言文一致にその主たる原因があると考えられる。漢語のエクリチュールの圏域全体では、いかに洗練された漢語を用いるかよりも、いかに広い範囲で漢語が通用しているかが重視される。ある種のリングフランカとしての漢語がその中心において規範的な音声言語と結びつき、真正性を生じさせるのは、周縁において漢語がローカルな音声言語とせめぎあいつつ折り合うのと表裏の関係にあるのだ⁽⁸⁾。

一方、前者について漢語の媒介性は、今日の東アジアにおける文化的情報の実態に即して、より抽象度の高い言語で語り直されなければならない。かつて書記言語として漢語が主流であったベトナムや朝鮮半島、日本では、漢字が廃止されるか、その使用範囲が狭められるかしている。そうしたなか何が漢語に代わって分断されたローカルな声を媒介するのだろうか。この点は、本稿の直接の課題ではないが、『ベトナム難民少女の十年』を漢語の媒介性に着目しつつ、マイナー文学として読み解くうえで、多少なりとも意識すべき点である。

IV ローカルな音声言語と抛りどころとしての漢語

前章では、ランの経験をマイナー文学として読む指針について検討した。本章では、それを踏まえ、『ベトナム難民少女の十年』からベトナムでの生活、ベトナムから脱出後の海上、来日直後に編入した中学校、日本での大学受験という4つの場面を取り上げ、ローカルな音声言語に対峙する「私」にとって、漢語がいかに抛りどころとなってきたかをたどってみよう。

1. ベトナムでの生活——ローカルな音声言語からの排除

「私」が生まれ育ったベトナムの中国人居住区「チョロン」は、「日常が多言語社会だった」とランは書く(トラン・吹浦 1992: 190)。しかし、ランにとってすべての言語が同等であったわけではない。

小学校は文荘というほとんど中国人ばかりの学校でした。でも北京語とベトナム語の両方で授業をやります。家では広東語と海南語です。友だちと先生はほぼ九〇パーセントが中国人ですので、日常生活はほとんど全部広東語です。授業だけが別、遊び時間は広東語(トラン・吹浦 1992: 190)。

日常生活で主に使用する話しことばは広東語であり、家庭では海南語を使用する。また、学校の授業では北京語とベトナム語を使用していた。「漢字」は幼稚園の頃から練習し、「漢字を見ながら、漢字の中で育つ」という経験をしていた(トラン・吹浦 1992: 143)。一方、英語について、ランの姉たちは英語を学ぶ機会があったが、1975年のサイゴン陥落以降に中学生になった「私」は学校で英語を学ぶ機会はなかった。しかし、「これじゃあいけない」ということで、1年ほど、中国系の教師のもと、週3回英語を勉強し、日本の中学2年生ぐらいの英語力になったという(トラン・吹浦 1992: 100)。

これらの言語に対して、ベトナム語はランにとって日常的に接する言語でありながらも、「ベトナム語のネイティブではない」として排除される言語でもあった。ランは、ベトナム語を学校やテレビ、日常生活を通じて自然に身につけた（トラン・吹浦 1992: 190-191）。しかし、中国系であることを隠さなければならない切迫した状況のなかで、ベトナム語の発音によって中国系であることがわかってしまう。

でも、どんなにうまくベトナム語を話しても中国人であることはごまかしきれません。ものの三十秒でも話したらバレてしまいます（トラン・吹浦 1992: 53）。

共産党に全財産を渡さなければならなくなり、ランの家族は 1978 年 8 月 15 日に自宅を去ることになった。家を没収された後、「新経済区」と呼ばれる荒れ地に連れて行かれて重労働に従事させられることを恐れたトラン一家は逃亡を図り、知り合いの家 4 か所に分散した。ランの父は家を明け渡す前に家族で国外に出る決心をして脱出の準備を進めており、脱出までの間、「隠れ家」で生活することになった（トラン・吹浦 1992: 48-52）。その際、ランの家族は、誰かに会うことを心底怖がる。誰かと会話をすれば、自身が「中国人」であることを隠すことはできないからである。

ベトナムからの脱出前夜という切迫した状況で、ランは、ローカルな音声言語が持つ暴力性を経験する。それは、ランの家族にとっての話しことばである海南語や広東語が主流な音声言語となっていない地域では、どこでも経験されるローカルな音声言語による排除である。行く先々でローカルな言語からの排除を経験しがちな「難民」としてランが、何を抛りどころにそうした音声言語の暴力性と対峙し得たのか。次節ではその点についていくつかのエピソードを紹介しながら論じていこう。

2. 海上——響きをつなぐ漢語

国外への脱出などの際に何を持っていくかは、その後、その人が何を抛りどころとして再出発するかを知るうえで一つの手がかりとなる⁹⁾。ランは 1978 年 12 月、15 歳の時に姉や兄と共に 4 人で難民船に乗り込んで、ベトナムを出国することになった。ある日、突然、サイゴンの「隠れ家」に迎えが来て、軽三輪乗合自動車や列車を乗り継いでベトナム中部のダナンに移動し、そこから少し南の港町まで歩いた（トラン・吹浦 1992: 63）。ランたちが持ち出したのは、出生届や文荘中学の学生証など身分を証明するさまざまな書類、住所録、辞書などであった（トラン・吹浦 1992: 96）。

私は、ノートと住所録、家族や友達の記念写真。ペンは舟での借物でした。姉は英語と中国語の辞書を持ちました。私より十歳年長で、高校を出ていましたし、英語をかなり勉強していました（トラン・吹浦 1992: 87）。

脱出において、多くの文字、特に漢語で書かれたものを持ち出している点は、漢語の媒介性を彷彿とはさせるが、切迫した状況で身分を証明する書類を持ち出すことはそれほど不思議はない。特筆すべきは、日本に暮らすランの兄・チーの住所を書いた書き付けを、ローカルな音声言語、つまり日本語の発音で暗記していた点である。

チーの住所を書いたものは肌身離さず持って歩いていましたし、それに覚えていました。今でも言えますよ。忘れられません（トラン・吹浦 1992: 87）。

お互い命ある限りどこかで.....結局、上の兄二人が日本にいますので、たとえ兄弟姉妹がバラバラになってもそこを拠点にして、最後は何とかなるんじゃないかなという心の支えがありました。だから、桐生の兄の住所を日本語の発音で暗記していました。電話番号もいまでも書けます。命がけで覚えたんですから（トラン・吹浦 1992: 63）。

明言はされていないものの、桐生市の兄の住所は漢字で書き付けられていたと考えられる。また、これも明言されていないものの、「今でも言える」、「暗記していた」と書いているので、日本語の発音は、ローマ字表記などされていなかった可能性もある。漢字で書かれた兄の住所の書きつけと、その日本語の発音が、ランにとって出国の時の支えになっており、「私」を未来の生活へと導く役割を果たしていたのである。

次に海上でのエピソードを見ていこう。ランが出国のために乗った船はダナン、北ベトナム沖、海南島と中国大陸との間の海峡、マカオを経由して最終的には香港に到着した。その過程で、遠くに船が見えることは何度もあったが、実際にコンタクトが取れたのは4回か5回であった。食料をくれた船もあったが、なかなか助けてもらえず、待ち続ける日々であったという（トラン・吹浦 1992: 74-75）。漂流中、通りがかる船があると、さまざまな言語を駆使してコンタクトを取ろうとした。

そこで、さっきの海上での話に戻りますが、通りかかった船は香港と日本のでした。「おーい、たすけてくれーっ」という感じで一所懸命叫んで何とか応えてもらい、寄ってきてもらうんです。いろいろな中国語でトライしているうち、どれがいいか決まってきます。「ほかの船を待ちなさい。元気だせよ」とか言われました。日本の船とは英語でしました（トラン・吹浦 1992: 83）。

ランは音声言語として広東語や海南語、北京語を話すことができた。同じ船に乗っていた人たちもほとんどが中国系であったので、「いろいろな中国語」を使って通りかかる船とコミュニケーションを取ろうとしたのである。

海上を1か月ほど漂流した後、ランたちは港に到着することができた。しかし、誰も助けに来る気配がなかったため、そこが難民キャンプがある香港ではなく、マカオだということに気づいた。夕暮れ時になってマカオの警察の船に発見され、「香港へ行け」と指示されたという。この際の言語については、「これは中国語だからすぐ通じました」と書かれている（トラン・吹浦 1992: 91）。ランたちの乗った船は警察船にロープで引っ張られて香港へ移動した。

ボートでダナンの少し南の港町（ホイアン辺りだとランは推測している）⁽¹⁰⁾を出発し、「私」はさまざまな「中国語」の発音を試みながら、マカオにたどり着く。その当時のマカオや香港は広東語が通用する地域であり、このときの「中国語」も、広東語の音であったと想像されるが、ランは、広東語や海南語、普通話の発音の違いを意識しているにもかかわらず、作品のなかでは「さまざまな中国語」という表現を用いている。それは、あたかも広東語や海南語、普通話の個々の発音とは別に、「私」が感じる「中国語」の響きがあるかのように描写される。次の引用は、マカオの港に到着し、その風景を見た際に感じた「中国語」の響きについてランが描写している箇所である。

「港」という言葉の響きはとてもあたたかでした。中国語では「ガン」です。その「ガン」という音と言葉が親愛なる母を思わせて、旅に疲れた子どもたち、私の小舟をいつでも守つ

て受け入れてくれる、そんな温かい優しいものに港や町が思えました。島の上の家屋や街並がだんだん大きくはっきり見えてきました。それが明らかに社会主義社会や共産主義社会のものではなく、自由世界のものだとなりました。街の雰囲気は昔のベトナムと同じだったから、一層懐かしさというか、温かさが感じられました（トラン・吹浦 1992: 90）。

「私」は海上での漂流を経てやっとたどり着くことのできたマカオの街並みを見て、「自由世界」であった「昔のベトナム」を思い起こし、「中国語」の音の温かさを感じている。しかし、「港」ということばを「ガン」という音の響きとして受けとめているのは、現地の警察から発せられた音を契機としているのではおそらくない。マカオで話される広東語では、港は“gong”⁽¹¹⁾であり、「ガン」は普通話の“gǎng”、もしくは閩南語の“káng”に近い。海南語の発音は閩南語に近いものもあり、「私」が「ガン」という音を想起したのは、実際に耳にした広東語の“gong”が「港」という漢字を経由して、実際にはその場で耳にしたわけではない海南語の音として響いた、ということかも知れない。それは実際に耳にすることのできる個々のローカルな音声言語ではなく、その根底にある「中国語」の具体性を持たない音である。

香港に到着後も風景に関する描写は続く。香港にはすぐに上陸することができず、船上での生活を余儀なくされていた。

船からは「SONY」「NATIONAL」「NEC」「CANON」「味元（味の素）」とかのネオンサインがよく見えました。もちろん日本のばかりではありません。「可口可乐」「七喜」、何だかわかります？天下の名訳です。コカコーラとセブンアップ。香港の一〇〇万ドルの夜景を毎日見ていました（トラン・吹浦 1992: 94-95）。

香港の港から見えた文字として、ローマ字で書かれた日本メーカーの広告だけでなく、「味元」、「可口可乐」、「七喜」といった漢字で書かれた広告の例を挙げている。香港の夜景を彩る電飾広告は、それを見る人の音声言語に頼らずに意味を伝達する。ランがそのリテラシーを備えていたことは、1で紹介した兄の住所を書いた書きつけと日本語の発音の関係のように、来日し、ローカルな音声言語と対峙する際の抛りどころとなっていく。次にこの点に関わる『ベトナム難民少女の十年』のエピソードを紹介してみよう。

3. 来日直後——抛りどころとしての漢語

難民として来日したランの家族6人のうち、ランを除く5人は、再会を果たしてから約1か月後に姫路定住促進センターに入所した。一方、ランは姫路定住促進センターでの日本語教育は受講せず、兄の暮らす桐生市の中学校に聴講生として通うようになった。ランが学校に行き始めた日から、担任教員は「ココハイッカイ」、「ココハニカイ」と日本語を教えてくれた（トラン・吹浦 1992: 114）。

それで教室に入ったら、黒板には大きく「歓迎」って書いてありました。「カンゲイ」とは読めませんでしたが、意味はもちろん解りました。先生がみんなに紹介し、そしてクラス代表が「歓迎の辞」を述べ、何とプレゼントまでくださいました。何をいつているかはほとんど理解できませんでしたが、嬉しかったですよ。もうジーンときちゃって……（トラン・吹浦 1992: 115）。

ランの文章では「カンゲイ」とカタカナを用いて表記することで、「私」がその音の発音を知らなかったことが強調されている。音声言語のレベルでは、「私」は周囲との意思疎通に困難を感じており、例えば、給食の時間にはクラスメートがスプーンとお箸を持ってきてくれたが、お互いに言葉が通じず、困ってしまったという。そうしたなかで文字は、クラスメートと心を通わせる拠りどころだったのである。

当初、教員やクラスメートは、ランが漢字を「中国語」で読み上げることに関心を示していた。自伝的物語では、当時の『学級通信』が引用されている。学級通信には国語の授業で魯迅の「故郷」を取り上げた際に、魯迅の生地「浙江省紹興（チョウチャン シャオシン）」⁽¹²⁾を「彼女はまさしく正しい中国語の発音だろうと思わせる美しい発音で披露した」（トラン・吹浦 1992: 117）と記されている。

また著書には中学生の時から友人がメッセージを寄せた「私のひとこと」という覧があり、「ランが何ヶ国語もしゃべれるのが不思議で、最初のころみんなが自己紹介しながら自分の名前を中国語でどう読むのかを聞いていました」という友人のメッセージが紹介されている（トラン・吹浦 1992: 207）。このようにランは、「漢字」を「中国語」の音で発音することで、教師や同級生たちと交流するきっかけを得ているが、同時に文字とローカルな音声言語とのギャップにも直面している。

漢字の発音が解らなくて一番困りました。先生が最初の日授業で、黒板に「石油工業地帯」と書いたのを今でも覚えています。ベトナムには石油工業地帯なんてありませんから、正確な意味は解りませんでしたし、もしかしたら今もあやしいかも知れませんが、一応意味は解ります。ただ、それを日本語として読むかどうなるのか、つまり、「セキユコウギョウ……」とは読めないんです。まして、「子供」とか「埋め立て」「広場」なんていう「訓」読みのものは全く手が出ません。でもね、隣りの子が今先生が読んでいるところを指さしてくれるんです（トラン・吹浦 1992: 116）。

漢字を日本語で読み上げる際には、それが音読みなのか、訓読みで読むのかという問題も伴う。が、じつはこの構図は、ランにとって、ベトナムにいた頃の漢字とベトナム語の音との関係と同じである。広東語や海南語を家庭で用いていたランは、ベトナム語を学校やテレビなど、生活のなかで覚えたが、日本語についても「とても良い先生たちやクラスメートに恵まれ」しており、ベトナム語と同じ方式で覚えられたという（トラン・吹浦 1992: 191）。

みんなが“教育熱心”だったんです。それともう一つ、山口百恵の『蒼い時』という自伝を何回も読みました。あの人のことなら聞いて下さい。何でも知ってます。あの本で日本語の黙読、音読、速読、文章の書き方……いろいろなことを覚えました（トラン・吹浦 1992: 126）。

「ベトナム語と同じ方式」としてランが指摘しているのは「一般の生活」（トラン・吹浦 1992: 190）を通して覚えたという側面だけであり、はっきりとは書かれていないが、漢語の文字に発音をあてはめていくという側面も両言語に共通していたのではないか。『蒼い時』を教材に「黙読」、「音読」、「速読」の仕方を学んでいったとあるが、視覚的な「黙読」、「速読」と音声的な「音読」が対比されているのは、ランがいかに漢字を拠りどころとしながら、ローカルな声と向き合っていたかを考えるうえで興味深い。そうしたローカルな音声言語と

の対峙は、ランの進路を左右する大学入試において一つのピークを迎える。次にそのエピソードを紹介してみよう。

4. 日本の大学入学試験——ローカルな音声言語との相剋

ランは高校教員による支援や、全コースの受講を無料で引き受けてくれた大手予備校の指導と協力、難民を助ける会を通じて受けた支援のもとで大学受験の勉強を進めることができた。しかし、当時の共通一次試験では世界史が特に得点できず、1000点満点中700点程であったため、国立大学の医学部への進学は諦めざるを得なかった（トラン・吹浦 1992: 131）。世界史の難しい点について、ランは次のように書いている。

世界史の欧米人の名をカタカナで書いたり、中国人の名や時代、地名を日本の発音で読むのは大変でした（トラン・吹浦 1992: 136）。

「中国人の名や時代、地名」に関して、「中国語」と日本語で漢字の発音が異なっている点は先に挙げた事例と共通する。ここではさらに「欧米人の名」の音を日本語としてカタカナで書き起こす場合の問題点が指摘される。カタカナで書かれたある人物の名前を日本語で発音する場合、その音はその人物がもともと呼ばれていた名前の音とは異なっている場合がしばしばある。このことは「中国語」や「ベトナム語」で欧米人の名前を表記する場合にも生ずることであり、「中国語」や「ベトナム語」で音訳表記された歴史上の人物が、カタカナ表記された人物と結びつかないことも少なくないのだ。

さらに本稿の冒頭で引用した漢文の試験も、ランにとっては試練であった。ランが原著に近い発音とリズムで読み上げ、理解することのできる漢文を、わざわざ日本語式に漢文訓読し、解釈し直さなければ、国公立大学に入学することはできなかった。古文より漢文の方が得点できず、恨めしく思ったという（トラン・吹浦 1992: 137-138）。

私は中国系ベトナム人ですから、漢文はいわば自分の国語ですよね。そういう人の特性を生かそうとせず、何でも平等というのでよいのでしょうか。それでは「悪平等」になってしまいます。世の中がうまく行くには、「良き不平等」が必要なんです（トラン・吹浦 1992: 138）。

共通一次試験の漢文の問題では、漢文を日本語として読んでいくことが要求される。「中国系ベトナム人」であるランにとって「漢文はいわば自分の国語」であったが、サイゴンの華僑学校で身につけた中国の古典の知識は、日本の大学入学試験では活かすことができなかったのである。

ランにとって書記言語としての漢語のリテラシーは、それを抛りどころとして日本社会の複雑な制度に分け入っていくためのパスポートのようなものであった。しかし、大学入学試験では、音声言語としての日本語が立ち上がる。それは、縁もゆかりもない日本語の発音を新たに学ぶ際のことばの壁とは少し違っている。サイゴンの華僑学校で身につけた普通話の音、家庭での広東語と海南語の音、テレビや日常の暮らしのなかで身につけたベトナム語の音が、漢字を媒介して日本語の音と干渉し合うことに起因する困難さである。このことを踏まえて、次章では、複数の話しことば、あるいはローカルな声を繋ぎ合わせる書記言語、ないし書面語としての漢語が、ランの移動の経験にとって、どのような意味を持ってきたのか考察してみよう。

V ローカルな声を生きる

ランは、「中国語」（広東語、海南語、普通話）、「ベトナム語」、「日本語」といった言語の境界領域を移動してきた。それを可能にしたのは、複数の言語を習得する優れた能力もちろんだが、書記言語としての漢語が常にそれらの音声言語の「真ん中」にあったからでもある。真ん中の漢語は、ランの中学校での初日に黒板に書かれていた「歓迎」という文字のように、新たな音声言語の環境に入っていく心の拠りどころとなっていた。ランは、ベトナムにおいても、日本においても、しばしばローカルな音声言語からの拒絶を経験している。そうした事態が生じ得ることを予想しているからこそ、日本に居住する兄の住所を日本語の音で発音できるように何度も練習し、そらんずるのだが、それができたのも、おそらくは漢字で書かれた兄の住所の書きつけがあったからこそだと考えられる。

書記言語としての漢語は、東アジアを移動する移民や難民にとって、いわばパスポートのようなものである。それはラン一人に限ったことではない。ランには、サイゴンの華僑学校で机を並べた多くの同級生がいる。そのなかには中国語を学ぶ非中国系のベトナム人もいた。同級生のなかには、ベトナムから出国した後、どこに行ったかわからなくなってしまった人たちもいるが、後に難民キャンプで再会したり、突然、連絡が来たりすることもあったという。彼女らも、ランと同じようにおそらくは漢字で書かれた住所録を持ってベトナムを逃れていたのである。将来、「私」は世界一周旅行をして、各地でクラス会を行いたいと述べている（トラン・吹浦 1992: 195）。ランの華僑学校の同級生たちは、拠りどころとしての漢語を真ん中に持ちながら、それぞれのローカルな音声言語のなかを生きているのである。

このように見てくると、書記言語としての漢語こそがランたち難民にとって大切であって、移住先で出会うローカルな音声言語は、単に彼女たちに試練を与えるものでしかないようにも思えるが、それはランを理解するうえで半面でしかない。ローカルな音声言語のなかで生きることは、ランたちにとって、しばしばそれから拒絶されるとしても、漢語とは別の意味で大切な依って立つところとなる。この大切なローカルな声の場所をランは「故郷」や「ふるさと」という語で表現している。

ランは香港の難民キャンプを「第二のふるさと」と呼ぶ。それは、難民として同じ境遇にある人たちとともに、ローカルな音声言語から排除されない場にたどり着いた安堵に起因している。

今振り返って、香港時代を一まとめで言うと、安定性はなかったけれど、難民キャンプにはベトナムで知っている人もいましたし、同じ境遇の人たちが理解し合っていて、それがとてもよかったです（トラン・吹浦 1992: 108）。

香港の難民キャンプは、自らの中国系の出自や自分の考えを隠す必要がなく、サイゴン陥落前のベトナムのように、安心して知り合いに会うことのできる、懐かしさや温かさを感じる場所であった。キャンプでは、サイゴン陥落後のベトナムとは異なり、広東語や海南語といった難民それぞれの話しことばが排除されない。広東語や海南語を話すことのできない非中国系のベトナム人のベトナム語も含めてである。ベトナムから逃れざるを得なかったという同じ境遇によって、それぞれの話しことばが許容されているのである。

だが、そうしたローカルな音声言語から排除されないという安心感は難民キャンプという特殊な環境で実現した束の間の安住である。出国後、ようやくたどり着いたマカオの港が「中国

語」の響きを感じられる場所であったと「私」は書いているが、先にも述べたように、そこで「私」が想起した「中国語」の音は、マカオや香港のローカルな広東語の音に由来したのではなく、漢語の文字を経由した実際には耳にしていない海南語の音であったと考えられる。ランが「ふるさと」に求めるものは、そうした漢語の媒介性を越えて（あるいはローカルな音声言語から排除されないという難民キャンプの安住を越えて）ローカルな声のなかに入っていくことである。それはベトナムに対するランの複雑な思いのなかに如実に現れている。

ランにとっての第1の故郷はベトナムである。「私」のベトナム語の発音は、「私」が「ベトナム人」になることを許さない。にもかかわらずランにとって、ベトナムは一日たりとも忘れることのない生まれ故郷なのである（トラン・吹浦 1992: 168）。ただし、現在のベトナムは「私」が帰ることのできる場所ではない。

祖国の政府の圧政を逃れ、その下にいることを拒否したいから出て来たんですから、帰国という言葉はタブーなんです（トラン・吹浦 1992: 161）。

「私」は、阿倍仲麻呂の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」という望郷の念を歌った和歌に共感を示し、「ベトナムのサイゴン川にいでし月かも」と想うような時もある（トラン・吹浦 1992: 175）。どんなにローカルな音声言語に拒絶されても、そのローカルな声を懐かしみ、そのなかに入っていきたいと望む、複雑な感情がここには見られるのである。

とは言え、このようなベトナム語の音を懐かしむ気持ちは、ベトナムという特定の場所への郷愁というよりも、どの言語であれ、ローカルな声のなかで生きることへの願望であるとも言える。その願望は、日本で暮らしてやがて話しことばとしての日本語の音に向かっていく。

でも、何というか、このごろ私のほうが「周りの人は、民族的に自分とは違う日本人なんだ」ということをあまり意識しなくなりました。日本の方がどう思うかわかりませんが、日本社会にいたることがあたりまえのような気分になることさえあります（トラン・吹浦 1992: 155）。

すでに紹介したように日本語の音は、ランが移住先で学び、職を得て暮らしていくうえで大きな壁として立ちはだかつてきた。しかし、それは同時に、ランにとって「懐かしい故郷の響き」として感じるようになりたいと思う話しことばでもある。そうしたランの気持ちを汲み取っているのだろう。ランは、中学時代からの同級生の「私」の話しことばに関する次のような文章を紹介している。

ランの日本語についてもっとうるさく直してあげればよかったな、と今でも思うことがあります。あの頃のしゃべりグセが残っているからです。とかくクラスで浮き上がっていた私の愚痴を聞いてくれたし、相談相手にもなってくれクラスに繋ぎとめてくれました。互いの生まれた国を意識せず、心を許して付き合ってきたし、これからもそうなるでしょう（トラン・吹浦 1992: p. 208）。

この文章を書いた同級生は、日本語の音を押しつけるつもりで「あの頃のしゃべりグセが残っている」と言っているわけではないのだろう。ローカルな声のなかで生きていきたいという願望と、しかし、完全にそうなることはできないというランのひき裂かれた気持ちを代弁しているのだ。

このように『ベトナム難民少女の十年』での「私」は、いずれのローカルにおいても完全にその場に受け入れられることはないが、それでもそれぞれのローカルな音声言語によって語ることを諦めようとはしない。さまざまなローカルな声の真ん中にある、音のない漢語は心の拠りどころとはなるが、情感を表現するにはぎこちなくてもローカルな音声言語が必要なのである。ランが船でベトナムを脱出し、海上で漂流していたときのことを島崎藤村の『椰子の実』に重ねあわせて回想しているのも、こうしたローカルな声をめぐる逆説として解釈できる。

今になって、「海の日沈むを見れば 激り落つ異郷の涙」という島崎藤村の『椰子の実』を思い出します。「思いやる八重の汐々 いづれの日にか国に帰らむ」と続きますね。日本の歌の中で私が一番好きな歌の一つです。でも歌うと泣けて来ます。自分が一個の椰子の実みたいで……（トラン・吹浦 1992: 72）。

ここで注目したいのは「歌うと泣けて来ます」と述べている点である。ベトナムでは海は東側にしかなかったが、海上で夕日が海に沈むのを見て、本当に祖国を離れたのだと涙が出た（トラン・吹浦 1992: 71）。声に出して歌うことで、「ボート・ピープル」としての境遇と椰子の実が重なりあうのである。

ローカルな音声言語から排除されながらも漢語の媒介性を拠りどころに、ローカルな声を希求するランの姿勢は、ランが自身の名前の呼ばれ方に関して、「トラン」とカタカナで書いてほしいと述べていることにも見られる。

私の姓は漢字で書くと「陳」です。（中略）陳はベトナム語では TRAN です。私は名前を漢字で書かないで、他のベトナム人同様、カタカナで書くし、みんなにもそう書いてほしいんです（トラン・吹浦 1992: 169）。

「私」は「陳」という漢字の姓によって世界のどの地域に行くこともできる。普通話ならば“chén”、広東語ならば“chan⁴”、閩南語ならば“tân”というように、それぞれの行き先で現地の音で「陳」という文字は読まれ、現地の「文法」に即して受容／排除される。ベトナム語では“trần”と表記し、発音は「チャン」に近い。そうしたなか「私」は、日本では、「陳」という漢字の表記も、ベトナム語の「チャン」という音も用いずに、“tran”というローマ字表記に近似する「トラン」というカタカナ表記を敢えて用いる。漢字の「陳」という表記は、日本では「チン」と読まれ、そのように読まれた場合は「中国人」として認識されるであろう。漢語の姓を通行手形として、世界を旅するということならばそれでもいいが、日本語のローカルな音のなかで生きようとするランは、高校の世界史で学んだ歴史上の人物がカタカナで表記されることでローカルな声を獲得したように、「トラン」という、ベトナム語の音である「チャン」とも異なる音を選択しているのである。

最終的にランは日本国籍を取得し、「山川玉蘭」という日本名を名のようになる。

「中国系でベトナム生まれの日本人」^{やまかわごくらん}山川玉蘭の誕生です。チーが日本国籍を取得した時、「山川」という姓になりました。故郷は山と川だからということからです。「国破れて山河在り」と杜甫の詩にありますように、国が変わっても、ふるさは永遠なものであってほしいです。そんな願いを込めました（トラン・吹浦 1992: 209）。

難民としての漂流を支えた漢語とローカルな声、あるいは杜甫の詩からとられた「山川」という漢語で表記され、特定の場所とは結びつかない「故郷」への想いと、「やまかわ」というローカルな音で表された「ふるさと」への想いは、「山川玉蘭」というランの名のりにおいてようやく合流する。「山川玉蘭」というランの名のりは、移住先の言語とその欠如のなかを生きようとするランの生き方を如実に示しているのである。

VI 終わりに

本稿では、トラン・ゴク・ランの自伝的物語『ベトナム難民少女の十年』を、マイノリティであるランがマジョリティの言語である日本語を用いて創作するマイナー文学として読むことで、ベトナム語や日本語などのローカルな音声言語から排除されながらも、漢語の媒介性を抛りどころに、ローカルな声のなかで生きようとするランの生き方を浮き彫りにした。そうしたランの生き方は、まさにマイナー文学的、つまりマジョリティの属性とその欠如が共存するものとも言えよう。

『ベトナム難民少女の十年』に対するこうした読みは、移動のなかで複数の言語を使用する人を対象とした研究にどのような示唆を与えることができるだろうか。これまでメトロリンガリズム (Pennycook & Otsuji 2015) やトランスランゲージング (García & Li Wei 2014) に関する研究では、もっぱら「相手や場面や目的などの中で相互影響され使用されるプロセスとしての『ことば』の実態」に関心が寄せられ (川上 2018: 7)、主に口頭でのコミュニケーションに焦点があてられてきた。しかし、本稿で論じたように、書記言語ないし書面語としての漢語は、多様なローカルな声を媒介することができ、特定の音声言語から排除された移民や難民が、音声言語の壁に立ち向かう抛りどころともなってきた。

こうした漢語の媒介性は、国民国家における規範的な音声言語、すなわち「国語」による移民の排除を批判しながら、そのじつ音声中心主義的、ロゴス中心主義的に国民国家間での言語の分断を前提としてきた移民の言語をめぐるこれまでの議論のあり方を再考するうえで一つの鍵となる。アメリカ合衆国に移住したバイリンガル作家の作品を分析した Pavlenko (1998) は、移住に伴う第二言語学習の結果として、「習得」が起こるだけではなく、「喪失」と「(再)構築」という2つのステージが存在すると指摘している。しかし、出身地から移住先への移動は必ずしも直線的にとらえることができるとは限らない。ランの場合の漢語のように、ある言語や文化の属性とその欠如を併存させ、ともすれば分断されていると考えられがちな複数のローカルな声の間をとりもつ媒介項を想定してみる必要もあるのだ。

とはいえここに新たな疑問も生ずる。ローカルな声の「真ん中」に置かれ、複数の声の間を媒介するのは漢語だけなのか、マイナー文学的な移動の経験は、漢語やその他の媒介的な文字のリテラシーを持つごく少数の人たちの間だけにみられることなのか、といった疑問である。ランの場合はベトナムにおいて漢字のリテラシーを身につけていたが、華僑学校に通わなかった中国系ベトナム人もおり、ランのように漢字の読み書きができるとは限らない (林 2018: 143)。ローカルの声を起点にすれば、そうした「真ん中」は、ホミ・バーバの言う「差異の領域が重なり合ったり置き換えられたりすることで現れてくる裂け目」ということになるだろう (バーバ 2005: 2)、筆者らはローカルな声の側から見ることはせず、漢語のリテラシーに限らず国民国家のはざままで分断されたと考えられがちなローカルな声を繋ぐ媒介項を「真ん中」と呼び、議論を一般化する方向性を探りたいと考えている。そうした「真ん中」は、漢語のように可視的で、「オリジナル」として「コピー」との間に権力関係を生じさせる「充満した真ん

中」(したがってランの拠りどころとなる)とは別に(13)、オリジナルなき複製としての、あるいはボードリヤールの言えはシュミラクルとしてのローカルな声(ないし国民国家語)を媒介する「真空の真ん中」でもある(ボードリヤール 1982)。住所録や辞書でなく、そうした「真空の真ん中」を媒介とすることで、「移動」する身体とローカルな声との間には、これまでとは違った局面が生じる可能性があるのだ(14)。

もちろん、「国民国家」を消費する手だてとして、オリジナルなき複製を複製たらしめる「真ん中」を想定するには多くの注釈が必要であり、積み残した課題は、今後に期すほかない。『ベトナム難民少女の十年』に対する本稿

での読みは、そうした将来的な議論において、ずっと入り口側にある。移動の経験におけるある言語や文化の属性とその欠如をめぐる本稿での議論と、オリジナルなき複製を複製たらしめる「真ん中」に関する将来的な議論の橋渡しとなるキーワードは「書写」=「模倣」である。ランが高校時代に没頭していたのは書写であった。高校の書道部に所属し、放課後は勉強か書写をしていた「私」は、「墨をすって筆を持つと落ち着くし、漢字をやっていると中国人も日本人も同じなんだと実感します」と書いている。「私」は集中して何かをすることが好きなので、1時間ほど早く登校して一人でひらがなを練習したり、特に中国の古典の臨書をしていた。書写は大学に入学してから、勉強の疲れをいやすために続いた(トラン・吹浦 1992: 204)。

「書写」や「臨写」における模倣がどのような意味で複製となっているのか、また逆にオリジナルなき複製はどのような意味で模倣なのかを問うことは、今日の(もはや身体の物理的な移動に限らない)人の「移動」がどのような場で生じ、どのような意味を与えられるのかを問うこととなるのである。

付記 本稿では、宮原がマイナー文学の視点から、書記言語と音声言語を区分する記述戦略について検討し、林がその戦略にもとづいて『ベトナム難民少女の十年』のテキストを丹念にコーディングしていった。そのうえで、『ベトナム難民少女の十年』において、漢語と、ローカルな音声言語がそれぞれランの人生にとってどう解釈できるかについては、議論を通して分析をおこなった。

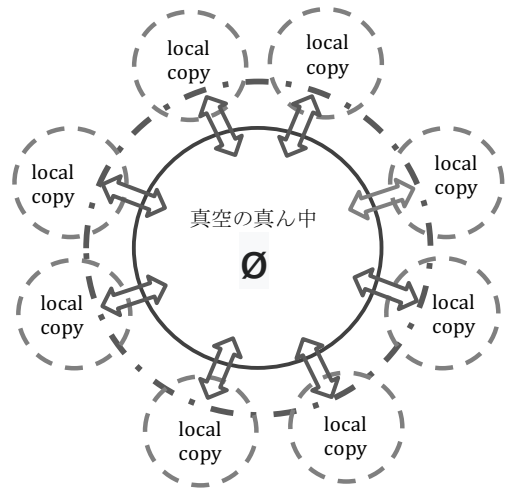


図3 真空の真ん中

注

- (1) 『ベトナム難民少女の十年』の中で使用される「中国語」という表現は、北京語を指すと考えられる場合や、どのような言語を指しているのかが曖昧な場合もあるが、本稿では原文に準じて鍵括弧を付して「中国語」と表記する。
- (2) 通例、「華僑」「華人」という呼称は、前者が中国国籍を持つ者、後者が移住先の国籍を持つ者といった厳密な使い分けがなされる。また「中国系ベトナム人」の語も、ベトナム国籍を持つ者を指す。しかし、ランの著作の中ではこれらの呼称によって指示される人たちの国籍は必ずしもはっきりとはしていない。このため本稿では、他の文献やランの著作からの引用箇所を除いて、国籍を問わずに「華人」という呼称を用いることとする。
- (3) 「書面語」とは狭義には洗練された形式を持つ漢語の文言を指す場合もあるが、ここではより一般的に、もっぱら文字を媒介としたコミュニケーションを可能にする言語と理解しておきたい。
- (4) 木村 (2021) は「言語」の区分を否定する傾向を批判し、言語的な不平等に対処するためには、あえて「言語」の区別に注目し、「言語」が使用される文脈を考慮することの重要性を指摘している。
- (5) 本稿では『ベトナム難民少女の十年』は文庫版を参照している (トラン・吹浦 1992)。
- (6) 本稿ではこうした「ラン本人の偽らざることば」というものを想定しない立場に立つ。
- (7) パスポート名 (音) と戸籍名 (文字) は、本質的に一致していない。
- (8) この点、温は、「中国人には『南っぽいね』とからかわれ、台湾人には『日本人っぽいよ』と笑われ、中国語が堪能な日本人には『でたらめだなでたらめだなあ』と苦笑される自分の中国語を、わたしはどれも自慢に思っている。なぜならわたしの中国語には、台湾で生まれて日本で育った自分の時間が刻み込まれていると思うから。わたしに限ったことではないだろう。言葉とは、もともとそういうものなのだ」と書いている (温 2016: 38)。
- (9) 湖中は、東アフリカ遊牧社会を対象とした、世帯単位での物品の調査を実施し、遊牧民の国内避難民にとって、どのような物品が避難後の生活における必要不可欠な基本的な生活材を構成し、それをもとにどのようにして生活の基本を回復してきたのかをたどっている (湖中 2018)。
- (10) 「列車でダナンまで行き、その少し南の港町まで歩きました。ダナンのすぐ南、十七世紀の日本人町の面影を今に残すというホイアンのあたりだったのかもしれませんが」 (トラン・吹浦 1992: 62) と述べられている。しかし、ダナン駅からホイアン (會安) までは 20km 以上離れており、「少し」歩いたという距離ではない。日本への向かう「港」という意味でホイアンを持ち出した可能性もある。
- (11) 千島英一 (編) 2005 『東方広東語辞典』東方書店の表記による。普通話の拼音と同様に無気音である。
- (12) 浙江 zhe-jiang、これを「チョウチャン シャオシン」と読むのは難しいようにも思われる。
- (13) 史書美は、この点に関して、映画の映像と音声言語、サブタイトルの関係を引き合いに出している。例えば、Crouching Tiger, Hidden Dragon を鑑賞した合州国の視聴者は、フィルムに現れた音声言語的な差異に気づかず、むしろエキゾチックな映像から、一貫した言語的、文化的な宇宙を幻想として見るという (Shih 2007: 6)。
- (14) この発想の根底に『攻殻機動隊 (Ghost in the Shell)』があることは言うまでもない。そこで「移動」した身体としての義体は、並列化を通して、オリジナルなきコピーとしてのローカルな声を獲得するのである。

引用・参考文献

欧文文献

García, O. & Li Wei 2014 *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

- Otheguy, R., García, O., Reid, W. 2015 “Clarifying Translanguaging and Deconstructing Named Languages: A Perspective from Linguistics,” *Applied Linguistics Review*, 6(3): 281-307.
- Pavlenko, A. 1998 “Second Language Learning by Adults: Testimonies of Bilingual Writers,” *Issues in Applied Linguistics*, 9 (1): 3-19.
- Pennycook, A. & Otsuji, E. 2015 *Metrolingualism: Language in the City*. London: Routledge.
- Shih, Shu-mei 2007 *Visuality and Identity: Siophone Articulations across the Pacific*. University of California Press.
- United Nations High Commissioner for Refugees 2000 *The State of The World's Refugees 2000: Fifty Years of Humanitarian Action*. London: Oxford University Press.

和文文献

- アジア福祉教育財団難民事業本部 2016『難民事業本部案内』。
- 温又柔 2016『台湾生まれ 日本語育ち』白水社。
- 川上郁雄 2018「なぜ『移動とことば』なのか」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子（編）『移動とことば』くろしお出版、1-14頁。
- 2021『「移動する子ども」学』くろしお出版。
- 木村護郎クリストフ 2021(1993)「社会言語学に「言語」は必要か——ポストモダン言語論を問い直す」『社会言語学』21、1-18頁。
- ギルロイ、ポール 2006『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』（Gilroy, Paul, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. 上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳）月曜社。
- コスト、ダニエル・ムーア、ダニエル・ザラト、ジュヌヴィエーヴ 2011 (1997)「複言語複文化能力とは何か」（Coste, Daniel / Moore, Danièle / Zarate, Geneviève, *Compétence plurilingue et pluriculturelle*. 姫田麻利子訳）『大東文化大学紀要〈人文科学編〉』49、249-268頁。
- 五島文雄 1994「ベトナム難民の発生要因」加藤節・宮島喬（編）『難民』東京大学出版会、53-80頁。
- 湖中真哉 2018「物質文化と配給生活物資の相補的關係——東アフリカ遊牧社会における国内避難民のモノの世界」湖中真哉・太田至・孫曉剛（編）『地域からみた人道支援——アフリカ遊牧民の現場から問いなおす』昭和堂、65-90頁。
- 齋藤希史 2005『漢文脈の近代——清末=明治の文学圏』名古屋大学出版会。
- 千島英一（編） 2005『東方広東語辞典』東方書店。
- ドゥルーズ、ジル・ガタリ、フェリックス 2017 (1975)『カフカ〈新訳〉——マイナー文学のために』（Deleuze, Gilles / Guattari, Felix, *Kafka: pour une littérature mineure*. 宇野邦一訳）法政大学出版局。
- 戸田佳子 2001『日本のベトナム人コミュニティ——一世の時代、そして今』暁印書館。
- トラン、ゴク、ラン・吹浦忠正（構成） 1990『ベトナム難民少女の十年』中央公論社。
- トラン、ゴク、ラン・吹浦忠正（構成） 1992『ベトナム難民少女の十年』中公文庫。
- 内閣官房インドシナ難民対策連絡調整会議事務局 1996『インドシナ難民受入れの歩みと展望：難民受入れから20年』。
- 中山亜紀子 2016『「日本語を話す私」と自分らしさ——韓国人留学生のライフストーリー』ココ出版。

難民を助ける会・社会福祉法人さぽうと 21 2019『難民を助ける会+さぽうと 21 創設 40 周年
記念 日本発国際 NGO を創った人たちの記録：つぎの 10 年に向けて』認定 NPO 法人難民を
助ける会（柳瀬房子）・社会福祉法人さぽうと 21（吹浦忠正）。

バーバ、ホミ 2005（1994）『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』（Bhabha,
Homi K. *The Location of Culture*. 本橋哲也ほか訳）法政大学出版局。

林貴哉 2018「ベトナム人集住地域における複数言語の使用と学習に関する研究——日本に定
住した中国系ベトナム難民のライフストーリーから」『言語文化教育研究』16、136-156 頁。

ボードリヤール、ジャン 1982（1975）『象徴交換と死』（Baudrillard, Jean, *L'Échange
symbolique et la mort*. 今井仁司・塚原史訳）筑摩書房。

本間浩 1990『難民問題とは何か』岩波書店。

宮原暁 2017「フィリピン華人マイナー文学と多声性——境界領域での創作を手がかりとして」
『華僑華人研究』14、54-63 頁。

中文文献

温又柔 2017《我住在日语》（台北）聯合文学。

王德威 2006〈华语语系文学——边界想像与越界建构〉《中山大学学报 社会科学版》46、1-4
頁。